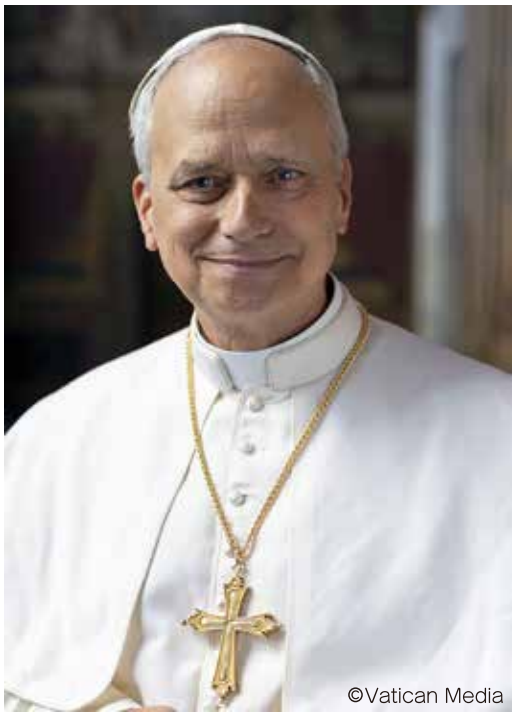
カトリック
仙台教区報

No.259　2025年7月1日

発行：カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel.(022)222-7371 Fax.(022)222-7378
発行責任：仙台教区広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

教皇レオ14世の誕生にあたって



Leo P.P. XIV

5月8日夕刻、バチカンのシスティーナ聖堂に集まったわたしたち133名の枢機卿団は、前日7日の夕刻に始まった教皇選挙における第4回目の投票で、兄弟であるロバート・フランシス・プレヴォスト枢機卿を、第267代目の教皇に選出しました。

同枢機卿は枢機卿団の前で、首席枢機卿代理のピエトロ・パロリン枢機卿からの問いかけに答えて選挙の結果を受諾し、「レオ」と名乗ることを宣言されました。教皇レオ14世の誕生です。

レオ14世は、聖アウグスチノ修道会に属する修道者であり、また米国出身者として初めての教皇となられましたが、聖アウグスチノ修道会の総長を務めた経験や、ペルーにおける豊富な宣教師としての体験、さらにはペルーで教区司教として務めておられたこともあり、福音宣教の現場に精通しておられる教皇様です。また直近ではバチカンの司教省長官を務められ、司教の役割についても精通しておられます。その意味で、教会の司牧の現場と行政の現場の両方に深い知識と経験を持つ、力強い牧者の誕生であります。

教皇選挙の直前、フランシスコ教皇が帰天された翌日から教皇選挙の前日まで、日曜と5月1日を除いて毎日開催された枢機卿団の総会には、毎回、180名近い枢機卿が参加し、日本から参加したわたしや前田枢機卿様を含め、ほぼ全員が発言する機会を与えられました。その中で繰り返し強調されたのは、教皇フランシスコの類い希な深い霊性に基づく決断力と行動力への感謝の言葉であり、同時に教皇フランシスコが残された道を継続して歩み続けることの必要性でありました。しかしながら枢機卿団は、教皇フランシスコの後継者を探しているのではなくて、使徒ペトロの後継者を捜し求めているのだということを、皆が心に深く留めていました。枢機卿団が祈りのうちに求めたのは第二の教皇フランシスコの誕生ではなく、主ご自身から牧者となるように委ねられた教会を忠実に導く使徒ペトロの後継者でありました。

多くの枢機卿が、多様性を尊重しつつも、信仰における明白性を持って、教会が一致することの重要性を強調されました。

これから教皇レオ14世がどのような司牧の道を進まれるのかは未知数です。教皇フランシスコとは異なる道を歩まれるかもしれません。引き継がれることも多くあるでしょう。そういった教会の現実の中で、ペトロの後継者に聖霊の豊かな祝福と、護りと、導きがあるように、教皇様のために日々お祈りいたしましょう。

サンピエトロ広場での第一声で、教皇レオ14世は、キリストの平和を確立することの重要性を説かれました。また対話と出会いの重要性を説かれました。共に道を歩むことの大切さも強調されました。現代の教会における社会教説の基礎となった回勅「レールム・ノヴァールム」を1891年に発表されたのは、レオ13世でした。レオの名前を継がれた教皇様には、社会に対する教会の働きかけについての強い思いがあるものと思います。

教皇様の声に耳を傾けながら、これからともに歩んで参りましょう。

また教皇を支え歩みを共にする枢機卿団のためにも、どうかお祈りくださいますようにお願いいたします。

2025年5月9日
日本カトリック司教協議会会長
カトリック東京大司教区　大司教
枢機卿　菊地功

第267代 新教皇レオ14世 誕生

教皇フランシスコは、 4月21日(月)逝去された。5月7日(水)には、新しい教皇を選ぶために80歳未満の投票権をもつ133人の枢機卿が、システィーナ礼拝堂に集まりコンクラーベ(教皇選挙)が始まった。

開始２日目の５月８日(木)午後６時９分、システィーナ礼拝堂の煙突から教皇選出を告げる白い煙が上がり、サンピエトロ大聖堂の鐘が鳴らされた。最初から数えて４回目の投票による選出であった。

午後７時 13 分サンピエトロ大聖堂バルコニーから新教皇選出が告げられた。

その後、午後 7 時 23 分ロバート・フランシス・プレヴォスト枢機卿(69 歳) が現れ、レオ 14 世を名乗られた。

レオ14世は、初の北米出身の教皇(聖アウグスチノ修道会) で、前教皇庁司教省長官、チクラヨ（ペルー）名誉大司教でもあった。

2008 年の「ペトロ岐部と187人殉教者」列福式のため来日している。

第 267 代教皇 レオ 14 世 略歴

1955 年　9 月 14 日　アメリカ合衆国シカゴ生まれ
1977 年　セントルイス、聖アウグスチノ修道会、善き勧めの聖母管区の修練院に入る
1982 年　6 月 19 日　司祭叙階
1984 年　教授資格を得、ペルー、ピウラのチュルカナスでの宣教活動のため派遣
1988 年　チュルカナス、イキトス、アプリマク使徒座代理区の聖アウグスチノ修道会志願者の共同養成プロジェクト責任者としてトルヒーリョ宣教に派遣
(1988-1992 年) 共同体修道院長
(1988-1998 年) 養成責任者
(1992-1998 年) 誓願宣立者の教師
(1989-1998 年) トルヒーリョ大司教区で、法務代理「サン・カルロス・エ・サン・マルセロ」大神学校の教会法、教父学、倫理学教授
1999 年　シカゴ、善き勧めの聖母管区 管区長
2001 年　修道会通常総会で総長に選出
2007 年　通常総会で同職を再任
2013 年　シカゴ管区に戻り、誓願宣立者の教師および管区代理を務める。
2014 年　11 月 3 日　教皇フランシスコにより チクラヨ(ペルー) 教区使徒座管理者に任命
12 月 12 日　司教叙階
2015 年　9 月 26 日　チクラヨ司教
2018 年　3 月　ペルー司教協議会第二副会長
2019 年　教皇庁聖職者省委員に任命
2020 年　教皇庁司教省委員に任命
4 月 5 日　カヤオ教区使徒座管理者に任命
2023 年　1 月 30 日　教皇庁司教省長官
ラテン・アメリカ委員会委員長
9 月 30 日　教皇フランシスコにより枢機卿に親任される
2025 年　5 月 8 日　新しい教皇に選出される

紋章

盾の左上は青地に銀色の百合。右下は矢で貫かれた燃える心臓。これらの全体は赤色で、閉じられた本の上に置かれる。盾の上には銀色のミトラ(司教冠)。ミトラは、三本の金色の帯と一本の金色の縦棒で飾られる。ミトラは、ひらめく赤色の垂飾りで裏打ちされる。垂飾りには金色の十字架と房がついている。垂飾りの前には交差したペトロの鍵（向かって左上部から右下部が金色、向かって右上部から左下部が銀色)。二つの鍵は赤いひもで結ばれている。

モットー

IN ILLO UNO UNUM

「わたしたちは彼(キリスト)一人のうちに一つである」

〈説明〉

紋章左上の青地は天の高さを思い起こさせ、マリアを表す。百合は古代から聖なるおとめマリアの象徴。

紋章右下の白地に描かれた、矢で貫かれた燃える心臓は、聖アウグスチノ修道会の象徴。

この図像は16世紀以降、聖アウグスチノ修道会士の紋章で用いられてきた。紋章にはさまざまなバリエーションが伴う。たとえば、聖アウグスティヌスがそうであったように、すべての人の心を変容させることができる神のことばを象徴的に示す、本である。

白地（教皇紋章においては象牙色）は修道会の他の紋章にもしばしば用いられ、聖性と純潔の象徴と解釈される。

※カトリック中央協議会「教皇レオ十四世の紋章とモットーの説明」から抜粋
※紋章のカラー表示については、仙台教区ホームページをご覧ください

〈新教皇の着座式は四大バジリカで〉

教皇が新しく選出された時、新教皇はまず、聖ペトロ大聖堂で着座式をとりおこない、次に、教皇直属のローマにある大聖堂を訪問し、正式な入堂と着座を行うことが慣例になっている。

新教皇が訪問されるこの大聖堂は、ローマの四大バジリカと呼ばれているもので、聖年の時の「聖なる扉」があることでも知られている。

ローマの四大バジリカは、「聖ペトロ大聖堂(サン・ピエトロ)」「城壁外の聖パウロ大聖堂(サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ)」「ラテラン聖ヨハネ大聖堂(サン・ジョバンニ・イン・ラテラノ)」「聖マリア大聖堂(サンタ・マリア・マッジョーレ)」である。

5月18日　ペトロの後継者として「任務開始のミサ」

レオ14世の教皇職開始の荘厳ミサが、聖ペトロ広場でささげられる。

世界の150以上の国々から使節が参加。日本からは麻生太郎元内閣総理大臣が特派大使として参列。教皇の着座を祝う人々が約20万人参加した。

聖ペトロ大聖堂

この儀式は、聖ペトロ大聖堂の中で始まった。教皇は、東方典礼の総大司教たちと共に、使徒聖ペトロの墓前で祈りと香を捧げた後、助祭たちが教皇の使徒職を象徴するパリウムと漁師の指輪と福音書を掲げ、入祭の行列が始められた。

ことばの典礼では、ペトロの使命と関りある箇所が読まれた後、パリウムと漁師の指輪を教皇に託す儀式が行われた。

続いて、全教会の人々が教皇への忠実を象徴的に表す「従順の儀式」が行われた。ここでは、教会を代表し、枢機卿、司教、司祭、助祭、修道者、信徒の代表者が、教皇への敬愛と従順を態度で示す儀式で表された。

教皇は説教で、「共に歩みながら、兄弟たちの信仰に奉仕する」と述べ、同時に、現在各地で戦争に苦しんでいる人々に思いをはせ、平和の恵みを聖母に託して祈られた。

この後、世界各国の代表者一人一人と挨拶をかわされた。

5月20日　聖パウロ大聖堂で入堂、着座の儀式

レオ14世は、直属バジリカの一つである、ローマ城壁外の聖パウロ大聖堂で入堂と着座式を行われた。

ペトロと共に、教会の礎・異邦人の使徒と呼ばれる聖パウロの墓前で祈りをささげられた。

その後、教皇座に着座し、以下のような説教をされた。教皇は、聖パウロが何よりも自分の召し出しを神から与えられた「恵み」であるととらえていたことに注目し、彼が、教会の迫害者であったとき、神が先に自分を愛してくださり、新しい人生へと招かれたことを、パウロは自覚していた。

ダマスコ途上で、パウロに現れた主は、パウロの自由を奪うことなく、選択の可能性を残された。パウロは努力し、心身の闘いを経て、この召命を受け入れた。救いは魔法ではなく、恵みと信仰の神秘である。神が先に愛してくださっているのは、人間が自由に信頼を込めて応えるようにと望んでおられるからである、と語られた。

ご自分がペトロの後継者として、またパウロの情熱を受け継ぐ者として、ご自分が主の呼びかけに忠実に応えることができるようにと、その恵みを祈り求められた。

5月25日　ローマの聖ヨハネ大聖堂で着座式

この大聖堂は、ローマの司教でもある教皇にとって、ローマ教区の司教座が置かれているカテドラルであり、四大バジリカの中ではもっとも古い歴史を持っている聖堂である。それゆえ、「ローマと全世界のすべての教会の母にして頭」と尊敬をもって呼ばれている。

ここで、教皇は、現在行われている聖年の巡礼者の受け入れと世話、また多くの企画の実現に感謝をされた。そして、福者ヨハネ・パウロ1世の言葉を引用しながら、ご自分も「自分の貧しい力とありのままの自分を皆さんに捧げたい」と語られた。

同日　聖マリア大聖堂を訪問し着座式

ラテランの聖ヨハネ大聖堂で着座のミサを行われた後、レオ14世は続いて、聖マリア大聖堂で、聖年の扉から入堂。

聖水を散布し、聖堂を祝別された後、この大聖堂に保管されている古い聖母子図「サルス・ポプリ・ロマーニ(ローマ人の救い)」を掲げた礼拝堂に行き、祈りを捧げられ、両手に抱えた花束を捧げ、「教会の舟を、危険を避けながら、平和の港へと導いてください」と祈られた。

続いて、聖堂内に集まった信者ともに、「主の祈り」を唱え、聖堂内の側廊にあるフランシスコ教皇の墓前で、祈りを捧げられた。

最後に、正面バルコニーから、集まった信者に、心からの感謝を述べられ、聖母の取り次ぎによって、すべての信者と家族に祝福と、教会において唯一の神の家族と共に歩むための助けを祈られた。

Sr. 長谷川 昌子（教区広報委員）

教皇フランシスコ 追悼ミサ

4月21日(月)午前7時35分(日本時間午後2時35分）に逝去された教皇フランシスコを追悼するミサは、仙台司教区として、4月28日(月)司教座聖堂において、ガクタン エドガル司教の主司式、平賀徹夫名誉司教、幸田和生名誉司教、小野寺洋一神父、髙木健太郎神父、申助祭が祭壇上で、左奥の席に座った他の仙台司教区の19人の司祭たちとともに、ミサがささげられました。

教皇の病状が、回復に向かっているというニュースで安堵していた信者たちに、今回の「教皇フランシスコ　帰天される」というニュースは驚きをもって受け止められました。そのためもあるのでしょうが、信徒の参加は 250 人を越えていました。

ことばの典礼の第１朗読では、使徒パウロのコロサイの教会への手紙 3·1～4が読まれ、福音朗読は、ヨハネによる福音20·1～9が朗読されました。その後、説教として、ガクタン司教は、次のように教皇フランシスコの思いを熱く私たち出席者たちに、伝えてくださいました。

イエスは、「『成し遂げられた』と言い、頭を垂れて息を引き取られた。」

これは、毎年、聖金曜日に朗読されるヨハネによる福音にある主イエスの最期の言葉と最期の行為です。ルカ福音書には、主の最期の言葉が**「父よ、私の霊を御手に委ねます」**と記されています。

バチカンニュースによると、教皇の最後の言葉の一つは、信者との最後の交流を支えてくれた看護師に伝えた「ありがとう」だったそうです。看護師のストラペッティさんは、５週間の間、肺炎を患った教皇に付きっ切りで看護を続けてきました。教皇はそのストラペッティさんに「広場に私を連れ戻してくれてありがとう」と言葉をかけられました。教皇は、復活祭の20日の正午、大聖堂の中央バルコニーに姿を見せられました。教皇は「親愛なる兄弟姉妹の皆さん、復活祭おめでとうございます」と挨拶され、ご自身の復活祭メッセージを、大司教の代読に委ねられました。復活祭メッセージに続いて、教皇はローマと全世界に「ウルビ・エト・オルビ」と言われている祝福をおくられました。この後、教皇は専用車で、広場を一巡され、非常に多くの巡礼者たちを祝福されました。教皇が次にこの広場に戻られたのは、 72時間足らずの後、任期中、住まわれたサンタ・マルタ館のチャペルから聖ペトロ大聖堂に移送された棺に収められたお姿としてでした。

教皇は、人生の最後の瞬間にはお苦しみはなかったと、現場にいた人々は述べています。教皇が常に望んでおられたように、復活節中、安らかに亡くなられました。

教皇の最後の遺言書も公表されました。その中で、教皇の墓の準備の費用はあらかじめいただいた寄付で賄われることと、墓は、特別な装飾なしに、唯一「Franciscus」と表記することを明確にされました。

遺言書の結びは、「わたしの人生の終末期の苦しみは、世界の平和と人々の間の兄弟愛のために主に捧げました」という言葉でした。こういった遺言やそのご生涯を通じて、教皇フランシスコは絶えず父なる神の御手に自分を委ね続けておられたことがわかります。

10年前の4月11日、教皇フランシスコは、特別聖年を定められましたが、聖年公布文書の冒頭の言葉は次の通りでした。

「イエス·キリストは、御父のいつくしみのみ顔です。キリスト者の信仰の神秘は、ひと言でいえばこの表現に尽きる気がします。いつくしみは生きたもの、見えるものとなり、ナザレのイエスのうちに頂点に達しました。」

教皇フランシスコの説教には、「想像する」(imagine)という言葉がよく使われています。教皇は、自分を読者あるいは聴き手としてその場面に登場する人物に置き換えて、その登場人物の気持ちを想像し語られます。貧しい人々との出会いの場では、教皇は私たちにある意味では移民、難民、ホームレスとして自分を想像するようと招きました。イエズス会会員としての想像力は、説教だけでなく、カトリック信者が「周辺部」にいる人々と共感するよう招くフランシスコならではの呼びかけの核心でした。

今日の福音箇所は、毎年、復活の主日に朗読されます。先に墓参りに行ってきた婦人たちの報告をたわごとのように聞いたペトロともう一人の弟子は、お墓に向かって走りました。墓に到着した二人は、「イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった」ことに気づいたと書いてあります。もう一人の弟子は、置いてある覆いと亜麻布の意味をどのように感じたでしょうか。

主のご遺体を包んでいた亜麻布を昆虫が脱皮した繭のように見て、「亜麻布と覆いの結び目を解いたのは、人間の力に及ばない」、こととでも考えたでしょうか。しかし、「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである」と書いてあります。

昨日は、「神のいつくしみの主日」でした。朗読は、今日の箇所の続きです。弟子たちはまだ恐怖におび

え、家に閉じこもり、中から鍵をかけて災いが過ぎ去るのを待っていました。そこへ主イエスが来られ、弟子たちの集いの真ん中に立たれ、「あなたがたに平和」と言われました。主イエスが共にいてくださる、だから何も恐れることはない、これがキリストの平和です。復活されたイエスとの出会いは、弟子たちにとってゆるしの体験でした。この弟子たちは主を見捨てて逃げてしまいました。しかし、主イエスは、弟子たちを責めるのではなく、再び弟子として受け入れ、新たに派遣していきます。

4月26日、教皇フランシスコの葬儀ミサを司式した枢機卿団主席ジョヴァンニ・バッティスタ・レ枢機卿は、説教の中で、教皇の教会と世界に対する奉仕を思い起こしました。それを聞いていた信者たちが、拍手で枢機卿の言葉に賛同の意を表しました。

「教皇は、その気質と司牧的指導の形を保ちながら、その力強い個性の痕跡をただちに教会の統治に刻みました。教皇は、一人一人の人また人々との直接の接触を築きました。困難のうちにある人への際立った関心をもって、自分の力を際限なく注ぎながら、すべての人、とくに地上で最後に置かれた人、除け者にされた人に寄り添うことを望んだからです。彼は、すべての人に開かれた心をもつ、民のただ中にある教皇でした。さらに彼は、社会の中で生じた新しい現象と、教会の中で聖霊が引き起こす事柄に注意を向けた教皇でした。」これはレ枢機卿の説教の言葉の一部です。

信仰の道を歩む私たちには、道から外れる者もいれば、戻って来る者もいます。教皇ランシスコは、主イエスのように互いに慈しみ深く、忍耐強く、親切であり、裁かないように、というメッセージを残されたような気がします。

レ枢機卿は、教皇フランシスコの使命の指針をこのように思い起こしました。

「教皇の宣教のもう一つの導きの糸は、教会がすべての人のための家だという確信でした。教会は常に扉が開かれた家です。教皇はしばしば戦争の時の「野戦病院」を教会のイメージとして用いました。そこでは多くの人が傷ついています。教会は、人々のさまざまな問題と、現代世界を襲う深い苦しみに決然と関わることを望まなければなりません。教会は、信条や状況を問わず、すべての人に身をかがめ、その傷をいやさなければなりません。」

葬儀ミサの最後の聖歌は、主の慈しみを願うキリエ・エレイソンで始まった連願でした。私たちも、洗礼を受ける時、聖人の連願が唱えられます。主イエスと聖人たちは、私たちと共に旅をします。私たちは、いつか聖人たちの集いに加えられることも望んでいます。

「わたしのために祈ることを忘れないでください」、教皇フランシスコがいつも講話や謁見をその言葉で終わられました。忠実に神の僕としての使命を成し遂げられた、教皇フランシスコに感謝を込めて、教皇に永遠の憩いが与えられるように、心を一つにして祈りましょう。

第 266 代教皇 フランシスコ 略歴

アメリカ大陸初の教皇となったホルヘ・マリオ・ベルゴリオは、アルゼンチン出身のイエズス会士です。教皇選出当時は 76 歳で、ブエノスアイレス大司教でした。米大陸ではすでに優れた人物と知られ、質素で、とても愛されていた司牧者でした。大司教になっても、たいていは地下鉄やバスを利用し、遠くにもおもむき、広く動き回っていたからです。

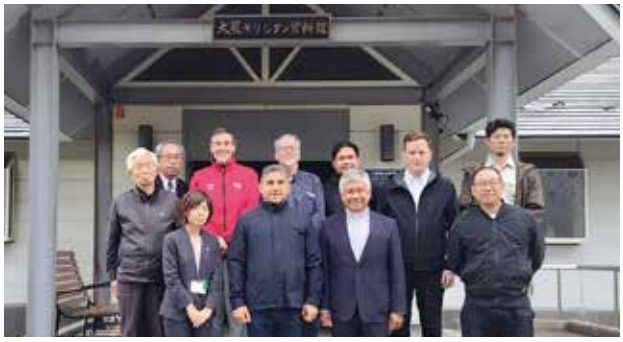
アパートで自炊する暮らしを選んだことについて、「わたしの民は貧しく、わたしもその一人」と語っていますが、教皇になってもこの基本姿勢は変わりませんでした。

初の南米出身教皇誕生までの歩み

1936 年　12 月 17 日　アルゼンチンの首都ブエノスアイレス生まれ
1958 年　3 月 11 日　イエズス会に入会
1969 年　12 月 13 日　司祭に叙階
1973 年　7 月 31 日　イエズス会のアルゼンチン管区管区長
1987 年　宣教活動視察のために日本を訪れる
1992 年　5 月 20 日　教皇ヨハネ・パウロ二世よりブエノスアイレスの補佐司教に任命
　　6 月 27 日　司教叙階
1997 年　6 月　3 日　ブエノスアイレス協働大司教
1998 年　2 月 28 日　ブエノスアイレス大司教
2001 年　2 月 21 日　教皇ヨハネ・パウロ二世より枢機卿に親任される
2013 年　3 月 13 日　教皇就任
2015 年　5 月 24 日　回勅『ラウダート・シ ーともに暮らす家を大切に』公布
　　12 月　8 日　いつくしみの特別聖年開幕
2019 年　11 月 23 日～26 日　日本訪問
　　長崎でミサ、広島で平和の集い、東京で東日本大震災の被災者との集い、若者との集い、ミサを開催
2023 年　10 月 4 日～29 日　世界代表司教会議（シノドス）第 16 回通常総会第 1 会期開催
2024 年　5 月　9 日　2025 年通常聖年の大勅書『希望は欺かない』公布
　　10 月 2 日～27 日　世界代表司教会議（シノドス）第 16 回通常総会第 2 会期開催
　　12 月 24 日　通常聖年開幕
2025 年　4 月 21 日　逝去

駐日教皇大使と司祭たち、キリシタン殉教地を巡礼

5月7日(水)から9日(金)にかけて、駐日教皇大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教が東京教区の宣教師の司祭たちと共に、大籠教会などキリシタン殉教地を3日間巡礼なさいました。



大籠キリシタン資料館で：
前列左から二人目が駐日教皇大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教

第1日目の7日は東京を発って、一関駅で仙台教区のガクタン司教と合流され、午後、大籠教会、大籠キリシタン殉教公園に着きました。ここでは当時のキリシタンたちの信仰生活などを偲び、豊かに集められた資料館では、布教と殉教の歴史について説明をしていただきました。

2日目は、巡礼教会になっている元寺小路教会へ。

18時から聖年の扉をくぐり、カテドラル元寺小路教会で、新教皇の誕生を願い、枢機卿様方の上に聖霊の恵みを願ってミサが捧げられました。

主司式はガクタン司教、朗読は、ヘブライ書から取られており、福音は、ヨハネ福音の中からでした。

説教はガクタン司教で、マスメディアは、次の教皇の有力候補はこの方だ、と挙げていますが、この予想が当たったためしはありません。聖霊が、選んでくださるのです。と言いながら、今、新教皇様が誕生なさっていれば、一番早く、そのミサがささげられたのに、と冗談を交えながらもそれを望んでいる言葉が交わされていました。

Sr. 長谷川 昌子（教区広報委員）

カリタス大船渡ベース
感謝のミサと閉所式

カリタス大船渡ベースは2025年3月末日をもって活動を終了しました。ベースは全国・全世界から多くのボランティアが集まり、活動し、その拠点としての役割を果たしてきました。ボランティアには2099名の方々が登録され、繰り返し活動に来てくださり、被災地の大船渡市・陸前高田市の復旧復興のために各方面で力強く活動してくださいました。

2019年12月からのコロナ禍のため、ボランティアの受け入れを中断し、スタッフのみでできる活動を続けてきました。買物送迎や多種にわたるサロン活動、手芸サロン、スマホ教室、体操教室、英語教室などなど。そして被災者の安否確認のための在宅訪問。どの活動も地域の方々に受け入れられ、とても頼られ喜ばれました。被災地の復旧復興は確実に進みましたが、それにつれ、ボランティアができる仕事は徐々に減り、サロン活動も参加者が減少してきました。

在宅訪問は重要な活動ですが、資格も技術も無い私たちスタッフが行うには限界がありました。ベースは役割をもう十分に果たす事ができたと判断し、活動を終了することにしました。地域の方々にお伝えすると、涙を流しての温かい感謝の言葉を幾人からもいただきました。

閉所を目前にした3月11日にはそれまでベースのサロン活動に参加してくださった地域の方々約50人をご招待し、それまでのサロンの様子のスライドショー等を観ながら楽しく懐かしいひとときを過ごしました。

全ての活動が終了し、5月18日(日)、感謝のミサと閉所式が行われました。午前10時、大船渡教会には、信者、ベースの元スタッフ、元ボランティアなど約100名の方々が参加してミサがささげられました。司式は大阪高松教会管区の4教区（大阪高松、名古屋、京都、広島）の司教様4人と神父様1人、

司式してくださった司祭団、左から広島教区司教代理 瀧井 英昭神父、大阪高松教区 酒井 俊弘補佐司教、京都教区 大塚 喜直司教、仙台教区 ガクタン エドガル司教、大阪高松教区 諏訪 榮治郎名誉司教、名古屋教区 松浦 悟郎司教、大船渡教会 インセン神父

そして仙台教区のガクタン司教様と大船渡教会のインセン神父様の７人。主司式は京都教区の大塚司教様。互いのつながりを今後もつなげ、深めていきましょうと呼びかけてくださいました。説教は名古屋教区の松浦司教様。「希望の巡礼者」をモットーとする今年の聖年のロゴマークに触れ、「大切なのは、イエスにつながっていても私たちの人生は不安や恐れで揺れるものだが、たとえ揺れたとしても、私たちは絶対揺るがない命、つまりキリストとどこかでしっかりつながっているから、この世を生きられるのです」と説いてくださいました。ミサ後、全員で記念写真を撮りました。教会ホールで大船渡教会のフィリピン出身の信者さんたちが作った軽食を頂きながら、交流の時間を持ちました。ベースに移動して、午後１時から「閉所式」。ガクタン司教様の感謝の挨拶のあと、ベーススタッフが制作した思い出の写真

のスライドショーを鑑賞。スタッフ５人には感謝状と記念品をいただきました。これまでのご支援とお祈りを心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

カリタス大船渡ベース
元ベース長　菅原 圭一

訃　報

スール マリア アグネス 目黒 富久子（めぐろ ふくこ）帰天
（聖ウルスラ修道会）

〈略　歴〉
1933 年２月 27 日生まれ
1951 年６月 29 日　受洗
1956 年３月 25 日　入会
1959 年８月 31 日　初誓願
2025 年４月 19 日　帰天　92 歳

各地区からのお便り

第１地区より

〈三八ブロック／八戸塩町教会・鮫町教会〉
八戸塩町教会・鮫町教会合同四旬節黙想会

３月15日(土)～16日(日)に八戸塩町教会で、吉祥寺教会の森智宏神父様(神言会、八戸塩町教会出身)を講師に迎え、「八戸塩町教会･鮫町教会合同四旬節黙想会」を行いました。

初日14時から講話と黙想、決められた３か所で、希望者がゆるしの秘跡を受けました。２日目は、ミサ前の講話とミサ中の説教、そしてミサ後の講話でした。森神父様は、「ルカ(9･28b-36)による福音」を講話と黙想を交互に挟みながら、分かりやすく、ていねいに進めていきました。講話では聖書の読み方として、『文字』として読む、『窓』として読む、『鏡』として読むという３段階の読み方を説きました。「黙想の流れ」では、全部で三回の福音朗読、一度目の朗読で自分が気になった箇所を選ぶ、二度目の朗読でその箇所をもとに黙想をして、三度目の朗読でもう一度内容を振り返る、などを説いていただきました。

ミサ中の説教では、福音の解説と神学生時代のフィリピンで経験したことをお話ししてくださいました。

ミサの後、２日目後半の黙想会が再開され、フィリピンでの体験の続きをしてくださいました。

黙想会のあと、森神父様を囲んでの茶話会で親交を深めました。

森神父様、今回の黙想会のご指導、ありがとうございました。

神に感謝！！　　牧山 智廣（八戸塩町教会）

第４地区より

〈仙台東部ブロック／塩釜教会〉
お元気で森田神父様

第４地区仙台東部ブロック担当司祭の森田直樹神父様が東京カテドラル関口教会に移られることになり、復活祭の後に祝賀会＆送別会を行いました。

森田神父様は、塩釜教会に６年間お住まいでした。神父様は「寒かったけれど買い物や散策など塩釜ライフを楽しんでいました。」とご挨拶され、笑顔にあふれた会となりました。主日のミサ時間は塩釜教会８時30分から、東仙台教会は10時30 分から。ゆっくりと交流する機会が少なかったこともあり、神父様と別れを惜しむ人の列が途切れることがありませんでした。

結婚式の司式を受けた若いお母さんは、森田神父さまの結婚講座で、「母とは、父とはどういう存在ですか？」の設問に、彼と自分が別々に書き込み、それを発表し合いながら、これから築く理想の家庭について考えさせられた。司式で語られた小説『星の王子様』の話がいつまでも心に残っているそうです。森田神父様のお説教は分かりやすく簡潔で、私たちに希望を与えてくださいました。これからもお元気でご活躍されますようにお祈りしております。次回報告は〈こんにちはアンリ神父様〉です。

佐藤 則子（塩釜教会）

編集後記

新しい教皇様が選出された喜びとともに、私たちの教会について皆様と一緒に考えてみたいと思い、菊地功枢機卿様の５月９日の書簡「教皇レオ 14 世の誕生にあたって」を教区報にも掲載しました。

仙台教区広報委員会では、皆様から原稿を募集しています。投稿は随時受け付けていますので、下記のアドレス宛てにメールで添付ファイルでお送りください。手紙の場合は教区事務所宛てに郵送してください。　（関　毅）

c-hasegawa@blue.ocn.ne.jp　**次号発行予定日：９月１日(月)　原稿締め切り日：７月 20 日(日)**